

【入選】 「市の堀用水の水」

栃木県高根沢町立高根沢中学校 三年 加藤 広佳

「たんたん田んぼの高根沢」

これは私の町の歌の一節です。この歌詞からもわかるように、私の住んでいる高根沢町は水利の便に恵まれた坦々とした水田地帯が広がり、栃木県を代表する米どころとして名高い町です。しかし昔は、水に恵まれない、米作りをするのが大変な地域だったそうです。この事実を知ったとき、私は信じられませんでした。現在の町になるまで何が起こったのか、調べてみることにしました。

約三五〇年前の春、「市の堀用水」という用水路ができました。それまでは、井沼川の水を利用して農業を営んでいましたが、水量の確保も容易でなく開田も難しかったそうです。そこで土室村の地頭山崎半蔵が、水量豊かな鬼怒川からの用水路を計画、多数の人足と十年の歳月をかけて完成したのです。当時は、道具などもなかなか手に入らず、作業のほとんどが人間の手によって行われたそうです。

その後、何度かの改良工事が行われ、延長四十三km、受益面積約二三〇〇haの大用水路となりました。この用水路が通る地域は、県内でも指折りの米どころになっていることから、市の堀用水は大きな役目を果たしていることがわかります。私も、高根沢待ちが水に恵まれた地域になったのは、市の堀用水のおかげだったことがわかりました。

市の堀用水の歴史を知った私は、昔の人が手堀でどれくらいの長さを掘ることができたのか、疑問に思いました。「延長四十三km」と本に書いてある用水の長さを見ても、長いのか短いのかピンとこなかったもので、高根沢町から市の堀用水の旧取入口まで用水沿いの水を、父の車でたどってもらうことにしました。

まず、自宅の一番近くに流れる市の堀用水を見ました。用水の幅はとても広く、水量も豊かで、ゴウゴウとうなりを立てて流れていました。私は父の車で、用水沿いの

道の流れとは逆方向の、取入口向かって走りました。昔と今の場所は違うらしいけれど、それでも豊かな水の原点を少しは知ることができると思ったからです。車は用水路沿いに桑窪、台新田、飯室と進んでいきます。ふと窓の外を見ると、たくさん水田を見ることができました。そして出発して数分後、私達の車は高根沢町を出、隣のさくら市に入りました。もちろん、周囲には豊かな水田地帯が広がっています。

それからまたしばらくすると、市の堀用水取入口のある塩谷町に入りました。用水の幅は、私の町で見たときよりも狭くなっており、流れる水量も少なくなっています。少しして、私たちの車は、ついに用水路の旧入口があった場所に到着しました。ここまで来るのに、出発してから実に一時間、車はほとんど走りっぱなしでした。こんなに長い距離を、昔の人々はたった十年で掘ってしまったのです。たいした道具も使わず、ほとんど手堀で…。私は、「すごい」の一言でしか表現できませんでした。

「市の堀用水」によって、私たちの町はもちろん、用水路が通る地域は、豊かな米作りをすることができるようになりました。市の堀用水がもたらしてくれた「水」が現在の豊かな収穫をもたらしてくれたと言っても言い過ぎではないでしょう。現在は用水から水田に、簡単に「水」を手に入れることができますが、それを当たり前のことのように思ってしまうはいけません。用水路の開発に力を尽くした人々、用水路を毎日掘った人々など、多くの人々の汗と涙が流されたことを忘れず、感謝しなければいけません。

私たちの身近に存在し、私たちに豊かさをもたらしてくれる「水」。これからは、昔の人々に感謝しながら、「水」を大切に使いたいです。